



記念祝賀会乾杯 小林一三顧問

松涛

№.30・31合併号

2014. 3. 10

学部長挨拶	2
同窓会長挨拶	3
今年度の活動計画	3
30号(60周年記念号)	4
支部だより	16
ペンリレー 同窓生からのたより	20
農学部フォーラム	21
国際交流	21
同窓会会計報告	22
学部だより	23
学科の動向	24

主な記事

学部 長 挨拶

農学部長

新村 末雄

はじめに、農学部同窓会60周年記念式典および記念祝賀会が、平成25年6月8日に多くの同窓生の参加のもと、成功裏に開催されましたことを心よりお慶び申し上げます。また、その式典において、緑化整備された

嵐丘庭（前庭と中庭）を農学部に寄贈いただき大変ありがとうございます。農学部の教職員を代表して心より御礼申し上げます。今回寄贈いただいた嵐丘庭は、「農学部らしさ」、「学生の学部への帰属意識」、「同窓生と学生の思いを40年後の100周年に繋げること」、それらをコンセプトに、越後の森をイメージして作ったものと伺っております。これから、農学部の教職員と学生は、嵐丘庭が越後の森になるよう力を合わせて育て、緑豊かな環境の下で、農学の教育研究により一層励む決意を新たにしているところでございます。

大学および学部を巡る最近の状況について報告させていただきます。

現在、全国の国立大学法人では、一昨年公表された「大学改革実行プラン」に沿って学部毎に特色・強み・担うべき社会的役割を明確にし、改めてそれぞれの学部のミッションを

再定義するという作業に取りかかっております。今回のミッションの再定義というのは農学部の将来に関する重要な事案であることから、作業部会を設置して検討を重ね、ミッション案を作成しました。提出した意見交換を平成25年9月5日に行い、現在は、文部科学省から出された意見を参考にしつつ、やりとりを行っているところであります。今回の農学部のミッションの再定義にあたって、農学部の教員は少ないにもかかわらず、人材育成、研究、社会貢献といった幅広い分野で、地域に多大なる貢献をしていることが改めて確認することができました。

また新潟大学では、下條文武学長が2期6年間の任期を終え、平成26年2月1日からは、前医歯学系長であり医学部長でもあった高橋姿教授が学長職を引き継いでおります。

一方農学部では、一昨年度科学省より採択された「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」が軌道に乗り、各種のインターシップ科目を通して「農力」の高い人材の育成および学部学生の就業

力育成に取組んでおります。このような取組により、農学部では高い就職率を維持しており、週刊東洋経済平成25年11月2日特大号「本当に強い日本の大学トップ300」の就職率ランキングでは全国大学の理系ベスト100の95位にランクされました。農学部では、名古屋大学、岡山大学、神戸大学に次いで堂々の4位にランクされております。

また、平成24年度に「教育関係共同利用拠点」として文部科学省より認定されたフィールド科学研究センター佐渡ステーションでの教育も順調に推移し、全国の大学の森林環境教育に貢献しております。さらに、「朱鷺の島環境再生リーダー養成ユニット」という地域再生人材養成プログラムにも農学部の先生方が多数参加しており、平成25年9月には3期生65名の修了生を輩出するとともに、平成25年10月から4期の新入生89名を5つのコースに迎え、1年間の実習や演習等を開始しております。一方研究面では、平成24年10月に刈羽村に開所した「新潟大学・刈羽村先端農業バイオ研究センター」が1年を経過し、このセンターを利用した研究の成果が期待されるところであります。今後は、この施設を新潟大学以外の試験研究機関の研究者にも広く利用していただくことを願っております。

最近、グローバル化、グローバル人材の育成といったことが声高々に謳われており、農学部でも、海外の大学と学部学生の段階で交流する機会が増えてきております。そのような海外の大学との研究および学生の交流を拡大するため、平成25年にタイグエン大学（ベトナム）および内モンゴル農業大学（中国）ともそれぞれ交流協定を締結し、さらに協定校を増やすべく準備を進めているところであります。

農学部同窓会には、国際交流活動や志願者確保のための広報活動、また、卒業祝賀会などの諸行事に多大なるご支援をいただいております。感謝申し上げます。今後とも、進藤会長をはじめとする農学部同窓会の皆様には、学部のサポーターとしてご支援とご協力を賜りますことをお願いし、私の挨拶とさせていただきます。



「嵐丘庭」銘板
揮毫者(小島誠・昭36農学) (左)と共に

新潟大学農学同窓会 60周年記念事業を終えて

同窓会長 進 藤 隆



同窓各位におかれましては、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

今年度は、皆様の絶大なるご支援ご協力のもと「農学部同窓会60周年記念事業」を成功裡に終えることができましたこと、会員各位ならびに運営に当たられた実行委員会の方々に感謝申し上げます。

農学部同窓会も60年の間に7000余名に達し、会員各位におかれましては新潟県内を始め国内外の各界各層で有為な人材として活躍されておられることは大きな誇りであり、60周年記念事業は次への飛躍の基礎となると確信しております。

記念事業の「嵐丘庭」の復元は関係者の多大なご努力とご協力で将来を見据えたキャンペーン作りができたと思います。

9月に私にとつて最後となる「農業科教育法」の集中授業で教室より、

ふと嵐丘庭を見ると多くの小学生が見学にきており記念事業を紹介した新聞広告の反響の大きさに驚きました。

ホームカミング・記念式典には、300余名の参加をいただき五十嵐キャンパスをご理解いただき、懇親会では、河渡キャンパス・五十嵐キャンパスでの旧知の間柄をあたため懇親を深めていただいたと役員一同感謝しております。

ところで、農業を取り巻く情勢はTTP交渉により激動の時が到来したと考えるとき、北陸有一の新潟大学農学部と同窓生の活躍が大きく期待される時かと思えます。

同窓会では、母校の支援を継続するためには組織の強化が求められます。

しかし、記念事業の募金、記念式典・祝賀会への参加等の結果から見るとある年齢層を境に大きな差が見られました。このような状態が継続すれば組織運営にも影響してきます。

60周年記念事業を終えた現在、組織強化のための実践が求められていくと思えます。

今後、会員の皆様が同窓会活動に関心を持ち、行事に積極的に参加い

ただける方策を考えて行きますので、今まで以上のご支援ご協力をお願い申し上げます。

会員各位のご健勝とご活躍を祈念して挨拶いたします。

2013年度活動計画

幹事長 箕 口 秀 夫

本会60周年記念事業終了まで全力をあげて取り組むとともに、農学部同窓会活動の活性化に努めていきます。また、全学同窓会にもこれまで通り協力していきます。

2013年度は、主として以下の活動に取り組みます。

1、「松濤」30・31号の発刊

60周年事業に特化した臨時版の30号を作成し、31号とともに会員に送付します。

より充実した内容を企画して読まれる会誌を目指します。

2、同窓会ホームページの充実
充実した魅力ある情報をお届けできるように更新に務めます。

3、支部活動の支援
各支部の活動をより一層支援します。

4、本会60周年記念事業への協力
来年の60周年記念事業の一環として「松濤」1〜30号の縮刷版を作成、

嵐丘庭の整備、農学部玄関ホール展示スペースの整備、記念CDの作成等記念事業の終了まで協力していきます。

5、学内諸行事への支援
「卒業祝賀会」を支援します。また、退職者に記念品の贈呈を行います。

6、学術・文化活動への支援
農学部や各学科が行う学術・文化活動を支援します。

7、受験者増加への取組みに対する支援
「高等学校での出前講義」や「高等学校での説明会」に行くための旅費の支援を行います。

8、全学同窓会への協力
運営委員会への参加、カード入会事業の協力、大学との懇談会や全学交流会への参加、機関誌「雪華」の発送など他学部同窓会と足並みを揃えた活動を行います。

祝
辞

新潟大学長

下
條
文
武

本日、新潟大学農学部同窓会六十周年記念式典が盛大に挙行されますことに、心からお祝いを申し上げます。

本学農学部同窓会におかれては、長年にわたり本学農学部に対して、教育研究・国際交流活動などの環境整備・充実に温かいサポートをいただいていることに、心から御礼を申し上げます。

特に、この度、同窓会六十周年記念事業として、「嵐丘庭」を「郷土の森」に育てるべく復元整備していただいたことは本学全体にとっても大変喜ばしいことであり、大学を代表して厚く御礼申し上げます。リニューアルされた中央図書館とあわせて、五十嵐キャンパスの「顔」として、広く学生達から愛され続けることと思います。

さて、本学の農学部は、新潟県立

農林専門学校を母体として昭和二十四年に設立されて以来、食料生産と環境保全に関しての幅広い基礎学力と総合的応用力を持った有為な人材を輩出し続けてきました。特に近年は、食の安全、食育、世界の食糧問題、環境・エネルギー問題等に対する社会の関心は高まる一方であります。本学農学部が、専門的人材養成や研究成果によって、それらの課題に対して極めて重要な役割を果たしてきたことは改めて申すまでもありません。また、最近では、「朱鷺関連での自然再生」や、「災害と食」、「米の品質評価」等々のテーマについても、我が国をリードする活動に取り組んでいることは皆様ご存じのことです。

本学では、「自律と創生」を大学理念として、教育と研究を通じて、地域や世界の着実な発展に貢献することを目標としております。この目標のもと、重点的に取り組んでいる事業が、「グローバルな視点と能力を備

えた人材の育成」であります。このグローバル人材育成については、近年特に社会からも大きな期待が込められていますが、本学では、文部科学省の大型の財政支援を得ながら鋭意取り組んでいるところであります。農学部においても、研究交流をベースとした積極的な国際交流を展開しており、農学部同窓会からも国際シンポジウムの開催等に当たってご支援いただいているところであります。「グローバル人材」と一口に言っても、コミュニケーションツールとしての外国語力はもちろんですが、専

門の学問分野での確かな能力がベースになければなりません。農学部では、インターンシップを充実させたカリキュラム改革を続け、国際交流も強化されており、学生は国際共同研究や留学生との交流を通じ、時代を先取りする農(能)力をさらに培われるものと思えます。

最後に、農学部同窓会の日頃からのご支援に改めて御礼申し上げ、同窓会の益々のご発展と、会員皆様のご健勝をお祈りし、祝辞といたします。

お祝いのことば

新潟大学農学部長

新
村
末
雄

新潟大学農学部同窓会60周年の記念式典が、下條新鴻大学学長、多和田全学同窓会長をはじめとする来賓のご臨席をいただき、農学部同窓会の会員諸氏多数のご出席のもとに、ここに盛大に挙行されますことを、農学部教職員を代表致しまして、心よりお祝い申し上げます。

農学部同窓会には日頃よりサポートとして、農学部の国際交流や広報などの活動に、また、卒業祝賀会などの諸行事に対してご援助とご支援を賜っており、衷心より御礼申し上げます。

また、今回の農学部同窓会60周年記念事業に農学部の前庭および中庭

の復元整備事業を組み入れていただき大変ありがとうございました。

新潟大学農学部では、平成21年度から校舎の耐震改修工事を行っており、今年2月にすべての工事が終了致しました。工事期間である4年間、講義には他学部等の講義室を借りなければならず、学生には大変ご不便をおかけしました。また、同窓生諸氏にも何かとご不便をおかけしたことを存じます。不便を我慢した甲斐があり、改修後の校舎は、以前のものとは比べものにならない程、明るく、また、機能的な建物になっております。また、改修工事に伴い、昭和50年に同窓生各位のご尽力により植栽された前庭と中庭の樹木を、ほとんど全て伐採しなければならぬ状況となり、大変残念に思っていたところであります。

承りますところによれば、本日の農学部同窓会60周年記念式典で、緑化整備された嵐丘庭を農学部に寄贈いただくことになっているようで大変嬉しく思っているところであります。

また、嵐丘庭は、農学部らしき、学生の学部への帰属意識、そして同窓生と学生の思いを40年後の100

周年に繋げることを、それらをコンセプトに、越後の森をイメージしてデザインしたものと伺っております。そのような同窓会のご厚志に報いるためにも、農学部の教職員は学生とともに、緑化整備された良い環境の下で、更なる農学の教育研究に励み、社会に貢献していきたいと決意を新たにしているところでございます。

顧みますと、新潟県立農林専門学校を母体として、昭和24年5月に、農学科と林学科よりなる新潟大学農学部が河渡の地に設置され、昭和28年3月に第1回卒業生50名が学び舎を巣立たれました。爾来、平成25年3月の第64回卒業生まで、農林専門学校卒業生を含め実に7、700余名の有為な諸氏が我が農学部で研鑽を積み、培った専門知識を身につけて、社会の各方面に飛び立たれました。そして、それぞれの分野で立派に活躍されておりますことは、誠に慶賀にたえない次第でございます。

昭和49年7月に河渡の地から五十嵐キャンパスに移転した以後では、農学研究科に博士課程である生命システム科学専攻が設置され、昭和62

年度からは大学院自然科学研究科へと統合されました。現在、農学部は大学院自然科学研究科の基幹学部として、理学部、工学部とともに教育と研究に参画し、その一翼を担っているところであります。

学部においては、平成3年度に5学科25講座体制から3学科9講座体制へと改組しております。さらに、平成13年度からは、講座の枠を外し、3学科3大講座制をとっております。そして、学生や社会から理解し易い教育目標を設定した専修コースを採用し、現在、3学科に8専修

コースを設け、学生の教育にあたりております。また、平成13年度からは、附属農場と附属演習林を統合し、フィールド科学教育研究センターを発足させております。

農学は、安全で安定した食料生産のための応用科学として出発しましたが、いまや食料生産にとどまらず、人類が生存する環境をも考える総合科学にまで発展してきました。従いまして、21世紀の人口、食料、エネルギー、環境といった諸課題を克服・解決するためには、農学の知識体系が必要とされており、人類が安心して暮らせる持続的社会的形成に向

け、農学に寄せる社会の期待は大きくなってきております。

そのような期待に応えるために、新潟大学農学部は、地域に根を下ろしながら、21世紀における持続的な農業の発展と環境の保全を目指し、総合的な教育研究を弾力的に推進・発展させることを目標に掲げております。

また、これまで交流のあった海外の大学に加え、この2年間にスペインのナバーラ大学、中国の寧夏大学農学院、タイのカセサート大学、ベトナムのタイグエン大学、中国の内モンゴル農業大学とも交流協定を締結し、これら海外の大学との交流を通して、グローバルな視点を持つ地域社会に貢献できる人材の育成に取り組んでおります。

さらには、学生の就業力育成にも力を注いでおり、その甲斐もあって、農学部卒業生の就職率は毎年全国的に高いところにランクされております。

一方、新潟大学農学部は、新潟、北陸、あるいは日本海沿岸という地域性を背景に、試験研究機関、自治体、大学、農業団体や企業などと連携して地域の課題解決に取り組む、そ

の成果を地域の活性化や支援に役立てていきたいと考えております。そのような成果によって、個性が輝く新潟大学農学部として、地域社会からの評価を受けることができるものと考えております。

ところで、昨年6月に文部科学省から「大学改革実行プラン」なるものが公表されました。この「大学改革実行プラン」では、文部科学省が「大学ビジョン」、「国立大学改革基本方針」、「国立大学改革プラン」等を策定し、国立大学改革を推進するとされております。それに向けて全国の国立大学法人では、学部毎に特色・強み・担うべき社会的役割を明確にし、改めてそれぞれの学部のミッションを再定義するという作業に取りかかっているところですが、

農学のミッション、言い換えれば社会的使命は時代とともに少しずつは変わっているものの、「命」を守る食料と環境を総合的に考えられる人材を育成するという使命は、基本的に変わるものではないと確信しております。

私たちは、これまで諸先輩方が築いてこられた新潟大学農学部において、その教育研究を継続発展させ、

地域社会から存在感のある学部として認められるよう頑張っていく所存であります。

これから乗り越えなければならぬ試練が多いことは覚悟しているところではございますが、今後ともわが農学部の発展のため、同窓会員の皆様の温かいご支援とご鞭撻をお願い申し上げます。

新潟大学農学部同窓会60周年記念式典にあたりまして、今までのお礼を申し上げますとともに、農学部の近況を述べさせていただきます。

最後に、農学部同窓会の益々のご発展、ならびに会員の皆様のご健康を心からお祈り致しますとともに、私共農学部として、学生が農学士に相応しい学力と、社会に適応する能力を身につけ、卒業後いろいろな分野で活躍できる「農力」の高い同窓生に育つように最大限努力していくことをお約束して、私の祝辞にかえさせていただきます。

本日は大変おめでとうございませ

ごあいさつ

農学部同窓会60周年記念事業実行委員長

三 沢 眞 一



農学部同窓会の60周年記念事業は、平成24年初めから実行委員会を組織し、準備を進めてきましたが、平成25年6月8日(土)に記念式典、記念講演を新築なったばかりの中央図書館のライブラリーホールで、祝賀会をオークラホテルで行いました。

当日は、下條新潟大学長はじめとする来賓も含め260名を越す方々にご出席をいただき、盛会のうちに予定の行事を終えることができました。事業に協力いただいた同窓生の皆様には心より感謝申し上げます。

下條学長は新潟大学ホームページの「学長のひとりごと」に当日の記念式典、講演会、祝賀会の様子を写真付きで紹介して下さいましたので、ご覧いただきたいと思っております。

今回の事業の中心は、農学部校舎の耐震工事に伴って大半が伐採され

ジソングの4曲を入れたCDを作成し、それぞれを2口（1万円）以上の募金者に進呈することになりました。

また今回は、この記念事業を6月4日の新潟日報1ページ全面を使ってPRしました。庭の様子を良く理解していただくためにカラー版にしました。これは同窓会はもちろんのこと、農学部を広く県民や高校生にアピールできたのではないかと考えています。新聞広告に協力いただきました企業、団体には心から感謝申し上げます。

この60周年記念事業は、実行委員会が発足した当初は、50周年のように大きい節目ではないので、マイナーな事業でいいのではないかと、という認識でしたが、終わって見ると、50周年記念事業をも上回る盛大な事業になりました。ここまでの事業ができたのは進藤同窓会長のリーダーシップと実行力があつたからであり、またこの事業を最後に退任される事務局の阿部さんにも本当にお世話になりました。心より感謝申し上げます。

記念式典次第

開式のことば

黙祷

同窓会長あいさつ

来賓祝辞

新潟大学長

新潟大学農学部長

記念品贈呈

目録

感謝状贈呈

同窓会事務局

(株)グリーンシグマ

(株)小林印刷所

閉式のことば

記念祝賀会次第

オープニング

「樽きぬた」

開会のことば

実行委員長あいさつ

鏡開き

乾杯

記念事業報告

万歳三唱

閉会のことば

60周年記念事業会計 途中報告（7月31日現在）

摘 要	収入の部	支出の部
募金	10,398,290	
祝賀会参加費	2,585,600	
式典祝儀	80,000	
式典・祝賀会経費		3,105,771
嵐丘庭復旧工事費		33,843,075
CD作成費（1000枚、著作権料）		534,870
新聞広告料		1,622,775
農学部エントランス改装工事費		1,296,085
その他記念事業実施経費		3,062,087
今後の支出予定		
松涛復刻版 1,000部		1,690,000
松涛・CD発送料等		536,315
基金より補填予定額	32,627,088	
計	45,690,978	45,690,978

記念講演

島の生物

— 佐渡島におけるこれまでの研究概要と今後の展望 —

新潟大学農学部フィールド科学教育研究センター

助教 阿部 晴 恵



私は2011年4月に佐渡ステーション演習林に着任し、主に他大学の共同利用に関わる業務を担当している。研究面では、これまで伊豆諸島で10年以上、着任後は佐渡島において、島嶼生態系の成立に関わる研究を続けている。このため本講演では、佐渡島という環境や歴史性がその生物群集の成立にどのように関わっているのかについて考察し、最後に佐渡島での研究の展望についてお話ししたいと思います。

種の多様性は生息地（ハビタット）の面積と強く相関することが知られている。面積が小さく周囲を海に囲まれている島嶼環境では、本土と比較して生物の生息種数が少なく、種間相互作用も単純である。このよう

な、研究はMacArthurとWilsonによる理論提唱以来、数多く行われており、そのメカニズムについては様々な蓄積がある。佐渡島は、東京23区の約1・5倍の面積（855・26km²）を持ち、本州4島を除くと沖縄の次に大きな島である。面積の大きいこの島では、維管束植物の種数をみると、近隣の新潟県内と比較するとやや少ないものの、面積効果に沿った多くの植物が生育している。しかしながら、佐渡島での種数は、冒頭で挙げたような面積効果だけに規定されるわけではないと考えられる。つまり、島の成立由来（歴史性）や厳しい自然環境などの諸要因が、定着できる生物を限定しているからである。

まず、自然環境について見てみよう。佐渡島は北西の季節風や積雪などの影響を受け、海岸や1000mを超える山頂部は特に厳しい自然環境に晒されている。その地形を見ると、カタカナの「エ」に似た細長い

2つの島で構成された特徴的な形をしている。この形は、円形に近い形と比較すると、周辺部分の面積が広く、結果的に外部の環境条件の影響、つまり潮や風などの攪乱を受けやすい（エッジ効果）。一方で、様々な攪乱を受け、複雑な地形であるがために、多くの生物が住める複雑な生息環境を提供しているともいえる。また、温暖な対馬海流に囲まれているため、新潟県内よりも暖帯の植生が豊かであり、日本列島の縮図と呼ばれる多様な植生を見ることが出来る。これらの要素をまとめると、佐渡島の複雑な自然環境（環境の多様性）が生物多様性をもたらすのに対し、厳しい自然環境（風圧等やエッジ効果）と島としての履歴が種の移入、定着を限定する。これらの兼ね合いによって、佐渡島における種の多様性が規定され、独特な島の生態系が成立している。

次に、佐渡島の成立由来について



佐渡には班の無いカタクリしかない

考えてみたい。島は、大陸やその他の陸地と接したことのない海洋島と、大陸やその他の陸地と接したところがある大陸島とに大別される。海洋島は、島外からの移入で種数の増加から始まるため、総じて種数は少ない。佐渡島は隆起によって出来た島であり、隆起後は、氷河期性の海面変化の影響を受けることなく、本州と分離していたといわれている。つまり、本州との陸橋の有無については言及できないが、かなり昔から独立している島（時間的隔離は長い）であり、海洋島としての性質が高いと言ったことが出来る。島の植物の中には、白花しか存在しない種（オドリコソウ、ヤマホタルブクロなど）、班のないカタクリなど、本州とは同種とされてはいるものの、明らかに形態的に異なる種が多い。またサドガエルやサドマイマイカブリのように、独自に進化した種も存在する。これらの種が存在する背景には、佐渡の成立の歴史が深く関わっていると考えられる。現存する種はどこからどのように移入し、定着し、また進化したのか？その結果が、現在の生物分布や構成にどのように表れているのか？その現象を捉え、メカニズムに迫る研究を行っていきたいと考えている。

記念講演

おいしさと機能性を求めて

— 米の品質・利用に関する研究 —

新潟大学農学部応用生物化学科

教授 大坪 研一



(1) はじめに

米は、トウモロコシ、小麦と並ぶ世界の三大穀物であり、特に主食として利用され、全生産量のうちで国際貿易に回る割合が低い自給的作物である。国内の米の消費量は一貫して減少傾向にあり、米の消費を拡大することによって米の生産を確保し、食料自給率を向上させるとともに、多面的機能をもつ水田を維持していくことが必要と考えられる。

(2) 米飯のおいしさとその評価

米飯のおいしさは、品種、産地、栽培法、貯蔵、精米条件、炊飯条件等によって影響され、「官能検査」や

「物理化学的測定」によって評価されるが、稲の収量性、高温耐性、耐病性などの両立が不可欠である。最近では白飯としてのおいしさに加え、寿司飯やカレーライスなど、用途別のおいしさとその評価も注目されるようになってきた。演者らは、新しい生物的食味要因の解明と新食味評価手法の開発に取り組んでいる。

(3) 米利用における社会的ニーズ

米および米加工品に対する社会的ニーズとしては、主食としての安定供給と安全性の確保、生産や加工のコスト低減、料理との調和性や加工原料適性、健康を維持増進するための機能性、表示や履歴への信頼性確保などが挙げられる。演者らは以前から米のDNA品種判別に関する研究を行い、新潟県と共同で「新潟コシヒカリBL」の判別キットを開発

してきた。最近では、醸造酒を試料とする原料・品質の判別に関する研究に取り組んでいる。

(4) 新潟地域における米の生産・利用の推進

新潟県24年産のコシヒカリは、魚沼、岩船、佐渡、中越の4地域で穀物検定協会の特A評価となり、新潟県では安全・安心で食味・品質の高い県産米の生産に取り組んでいる。魚沼では生産や炊飯に用いる水や米の低温保管が重視され、佐渡では朱鷺を育む環境調和型農業が推進されている。長岡や新発田では、「食味コンテンツ」が開催されており、胎内市では米粉の利用促進フェアに取り組んでいる。

(5) 新規分野としての米の機能性

米に含まれる機能性成分としては、食物繊維、フィチン酸、γ-オリザノール、フェルラ酸やトコロール類等が挙げられ、全国各地で米機能性研究が行われている。演者らは、農水省のプロジェクトで「超硬質米」の機能性に注目し、加工技術開発に取り組んでいる。新潟大では、米タ

ルギー化などの研究が行われている。

(6) 近隣諸国の米利用について

米は90%がアジアで生産・消費されている。韓国、中国、台湾、タイなどの諸国は、インド型や日本型の稲の栽培が盛んであり、生産性の改良に加えて、最近では、経済力の向上にともなう、食味や利用に関する研究開発が活発に行われている。

(7) さいごに

水田は、米の生産という役割以外にも、洪水の防止や水資源の涵養、生物多様性の維持、都市と農村の交流や学童教育の場、文化の伝承や美しい景観の保護などの重要な機能を有している。米のおいしさや機能性を改めて見直すとともに、未来の食料と国土や文化の保全という視点からも米の生産・消費の維持・拡大が必要とされている。



農学部同窓会60周年記念事業 「嵐丘庭」再整備の報告

株式会社グリーンシグマ

代表取締役 平 田 敏 彦
(第18回林学科卒)

1、「嵐丘庭」再整備の基本的 考え方

嵐丘庭の再整備プランは、2年前から紙谷教授担当の学生実習に組み込まれて、グループごとのワークショップを重ねながら、そのコンセプトや方針設定、具体的な計画づくりが検討されてきました。

その内容を各グループからプレゼンしていただき、その結果から優れたプランを選定し、その案をベースに、他のグループ案も参考にしながら、私どもが具体的なデザイン化を

行い、最終的な計画案を作成いたしました。

したがって現在の3、4年生の中には、直接この計画づくりにかわかり、さらに実際の土づくりや植栽工事などの施工にも参加してくれた学生さんも多くいます。

この嵐丘庭は、同窓会が寄贈する庭園であるという意義をコンセプトに織り込みながら、次のような基本的考え方で取り組みました。

テーマは「未来につながる郷土（ふさと）の森づくり」です。
基本コンセプトは

☆未来の同窓生とのつながりを、森づくりを通じて育みたい

同窓生同志の時間を超えたつながりを育むため、郷土の森づくりをスタートさせることで、

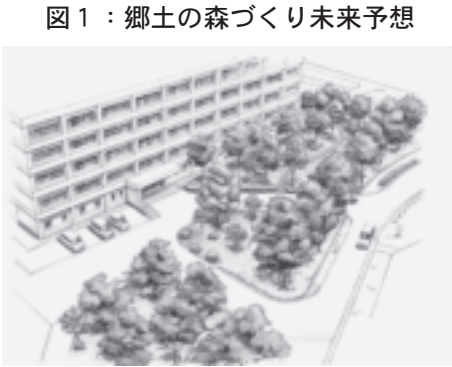


図1：郷土の森づくり未来予想

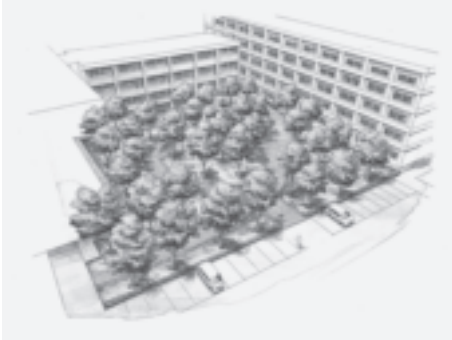


図2：郷土の森づくり未来予想

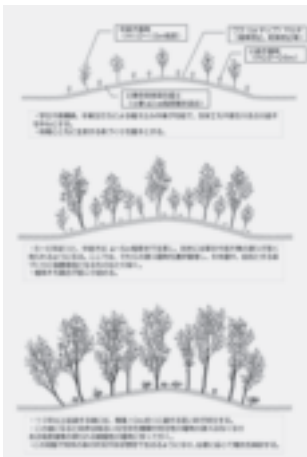


図3 森づくりのシナリオ

未来の同窓生に継続的な記録や育成管理を託して行きたい。

☆森づくりを楽しみながら学んでもらいたい

自然と人との相互作用によって、年々新たに創造されていく環境の変化を実感し、学びの場としても後輩たちに引き継いで行ってもらいたい。

☆地産地消の間伐材の活用事例として情報発信したい

間伐材を全て無駄なく使いきる活用モデルを木製園路や関連施設にデザインすることで、今後の未利用間伐材の活用事例として役立ててもらいたい。

☆一般市民に開放された空間を提供したい

この記念庭園を、多くの市民にも利用していただき、森の生長過程や季節の変化を楽しんでいただきたい。



図4
同窓会100周年頃の中庭の
予想図

「嵐丘庭」は、完成されたいきれいな庭ではなく、日々刻々と変化しながら育っていく森です。そこはいつ訪れても新しい発見があり、常に新鮮な感動があります。

この森の未来予想図と遷移のシナリオは、同窓会100周年に向けてのプロローグに過ぎません。

未来の同窓生に夢を託して今スタートした所です。

2、工事の概要報告

工事の概要を時間を追って以下に写真で紹介いたします。

□平成24年10月
学生実習で土壌改良と苗木植栽

写真1
実習で苗木植栽をする
学生さんたち



□平成24年11月
ボードウオークを
製作するためのスギ県産材の間伐

写真2：スギの間伐作業



写真3
高性能林業機械も体験



□平成24年12月
間伐材の製材

写真4：間伐材を粗挽きする
(木取りはコンピューター制御)



□平成25年1月
製材後の材を燻煙乾燥

写真5：樹皮や製材端材を燃料
に利用して燻煙乾燥を行う



□平成25年3月
ボードウオークの基礎工事

写真5：ボードウオークのコンクリート基礎工事



□平成25年4月
床板施工と木酢液塗布

写真6：ボードウオークの施工



写真7：燻煙乾燥の過程で発生した木酢液を、防腐・防虫剤として塗布



□平成25年5月
学生、教職員家族
医、OBによる記念植樹

写真8：
記念植樹風景



写真9：記念植樹を終えた同窓会幹事の記念写真



□平成25年5月
間伐材の根曲がりベンチ完成

写真10：未利用材を利用した
根曲がりベンチ



□平成25年5月 ウォーキングボ
ードの端材を加工して再利用した樹
名板

写真11：ウォーキングボードの端材を
焼きスギ板にして樹名板に再利用



□平成25年6月 工事完成

写真12：前庭の竣工俯瞰写真



写真13：中庭の竣工俯瞰写真



新潟大学農学部同窓会60周年記念式典・ 祝賀会に出席して

坂本 仁洋（S35・総農）

先ず以て同
窓会60周年お
めでとうござ
います。



私は、昭和
35年3月、総

合農学科(後の農芸化学科の一講座)
を卒業しました。地方同窓会は、北
海道支部に所属しております。同期
講座の仲間には、今回出席の小川、
武井両君と今回あいにく欠席の紅一
点の樋口(勝尾)さんが居りました。

卒論は生活科学(食品化学)講座、
倉沢文夫先生・伊賀上郁夫先生両名
誉教授のところで「水稻の乳熟過程
におけるQ粗酵素に関する研究」の
テーマをいただきました。3学年次
のころ農芸化学科の新設・計画の説
明があり、後の生物化学講座になっ
たようです。酵素化学等で特に酒類
(清酒)に興味を持っており、今も学
業界誌へ投稿しています。

卒業して50年をはや過ぎておりま
す。新潟には伊賀上先生の退官のお
祝いの会、幹事会(代理)、同窓会35
周年記念式典など今回で5回程訪れ
ています。

主な同窓会記念の式典・祝賀会は
次と思われま

・同窓会35周年記念式典
昭和62年5月22日

公開講演 講師 伊藤喜雄氏
「コメ作りを考える」

公開講演 講師 草柳大蔵氏
「問われるコメ文化のゆくえ」

・同窓会50周年記念式典
平成14年9月14日

公開講演 講師 立松和平氏
「自然とともに生きる」

・今回同窓会60周年記念式典
平成25年6月8日

感謝状贈呈
同窓会事務局 阿部信紘様

会等の新潟行きの際は、阿部様に
はお手数をおかけいたしております。
以下は、当日配布のレジユメの域
を出ませんが※

公開講演 講師 大坪研一氏
「おいしさと機能を求めて」

一米の品質・利用に関する研究―
★この演題は、私は、かつて在籍し
ていた講座に源流へ辿り着くものと
思料するだけに特に、なつかしく、
興味を持って傾聴いたしました。私
は、当時在学中、年に三〜四回位奥
羽本線に乗り新潟から青森(帰省先、
北海道岩見沢市)間、帰省時往復の
光景は、食糧大增産のもと秋田県男
鹿半島の付け根のあたり「八郎潟干

拓事業」を車窓から外国製超大型ダンプカー・機材等が、砂煙の巻く現場を胸を躍らせて見ていたものは、今では何であつたのかを誰かに聞いて見たいですが、有り体に言えば、その直ぐあとの最近の保証制度・減反策は形無しノ域、6兆円余り大金の投入、すでに90年代後半、決着したGATT（関税・貿易一般協定）ウルガイ・ランド農業合意でその改革は避けて通れないものになった。

各人はそれぞれのスタンスをとり、国の利益のためと唱えているが、市場開放をせまる所謂「黒船」はこの度のTTPが初めではない。前述のように20年も前から待機していたという事は御案内通りです。システムは全くの時代遅れです。

○主食食料自給率の向上と多面的機能の維持
○食味要因、新食味評価手法の解明と開発
○「新潟コシヒカリBL」の判別キック開発

○地域における米の生産・利用 食味コンテスト 米粉の利用促進
○新規分野米としての機能性（機能性食品）

○近隣諸国の米利用に注目 食味や利用・研究が活発
○最後に、米のおいしさや機能性を改めて見直すとともに、すぐそこまで来ている未来の食料と国土や文化の保全という視点からも米の生産・消費の維持拡大、さらなる

拡大が必要
公開講演 講師 阿部晴恵氏
「島の生き物」

—佐渡ヶ島におけるこれまでの研究と今後の展望—

★私は高校生の時分の夢、理科の科目の「生物」が好きで、その頃地元の大学生がやっていた学力コンクール（今の学力増進会の前身とも思われますが）等で2年続けて最高点を得たこともあり、この度の公開講演は、難しく、多岐でしたが、相当かなり過ぎ去りし、さて昔と興味を持ち拝聴させていただきました。

○佐渡ヶ島とその置かれた歴史とこの生物群グループ成立環境の展望
○佐渡ヶ島の特性と種の特性は種多様性と生息地の面積と強く関連してくる

○佐渡ヶ島のように面積が狭く周囲を海に囲まれている島嶼環境では、本土と比べ生物の生息種数が少ない
○しかしながら佐渡ヶ島での数種は、初めにあげたような面積効果だけで規定されるわけではないと考えられる。

○なぜ定着できる生物は、限定しているのか。
それは、佐渡ヶ島の成立以来、厳しい自然環境など更に歴史性なども相まつての好フアクター
○佐渡ヶ島の由来も思考、海洋島か大陸島か、独自進化した種の存在

阿部先生、佐渡ヶ島ステーションから来られると伺っておりましたが、トキのお話が聞けず残念でした。翌朝、トキを観察に佐渡ヶ島にわたりました。トキセンターのガイドの池田芳男様は、稲作農家の方でその案内は地域のトキとトキの里に愛着と大いなる誇りがあり、プライドもありすばらしく感じられました。得がたい充実した一日でありました。

コースは、両津港発↓/レンタカー
トキ保護と増殖を行っている①「トキ保護センター」↓隣接の施設②「トキ資料展示館」↓トキの生息や保護活動を学べる③「保護センター」↓トキを間近に観察できる④「トキふれあいプラザ」↓トキ公開講演・宿泊施設⑤「トキ交流会館」幸い、ここを出た時、3日前に放鳥のトキが頭上を飛翔する姿に運よく遭遇しました。

以上※当日レジュメの書写となりました。
★何分日時の経過もあり、時系列その他に誤りが多々あると存じますことを、お許し下さい。

終わりに、「松涛」へ投稿する機会を与えていただきました編集委員の皆様には厚くお礼申し上げます。今後、農学部同窓会のますますのご隆盛、並びに会員の皆様のご健勝とご発展を心よりお祈りいたします。

佐藤 直衛（昭41林）

河渡の学舎を卒業して早や47年が経った。思えば遠く青年・壮年を過ぎ大学は還暦（華甲）、わが身は古希を迎えた。そして、その幾多の時代を経てきた中で、人材を輩出してくれた学校は有難くも影日向となって自分と共にあつた。だから、素直に感謝の気持ちを持って60周年を祝いたい。

当日は少し早めに記念式典の会場へと向かった。初めてJR新潟大学前駅に降り、歩き、そして陽光一杯の農学部を眺めた。記念事業「故郷の森づくり」農学部嵐丘庭元整備事業の県産材で造られた大きな木道を歩いた。郷土の森を造るにふさわしい里山のアカガシ、山地のブナ等、夫々に名前を付けられて植林された雑樹は、まだかよわくこれから学生達の世話を一杯受けなければならぬ。「未来へつなぐ森づくり」は、きつと樹木学実習・研究の課題となることだろうと

思いながら、大きく育つことを祈った。

午後1時30分、記念式典は新潟大学付属図書館ライブラリーホール



同級生と共に記念撮影

ルで開催された。開催にあたって進藤隆同窓会長の掛声で物故者への黙祷が行われた。会長の式辞では昭和28年3月に発足した同窓会は歴代の会長（伊藤武夫・江畑正・小林二三）のもとで、母校発展の為に努力してきたこと、配布された別冊の同窓会のしおりでは歩みが年次毎に記載されていた。さて、嵐丘庭の造成は昭和49年に五十嵐キャンパスに河渡から移転した時に造成とあるが、あまり記憶にない。過去から未来へ続きたい出として、写真等に残しておきたいものだ。下条文武学長と新村末雄学部長から祝辞をいただいた、また、社会の各界に活躍する同窓生は7700人の卒業生が活躍していると報告をいただいた。

式典終了後記念講演会が開催された。一つ目は新潟大学農学部フィールド科学教育研究センター阿部晴恵助教から「島の生物」と題して講演をいただいた、林学出身としては学生時代に佐渡演習林の林道の設計実習を行ったところである、佐渡ステーション演習林として今の時代に繋ぎそこで研究が続けられていることこそ卒業生として嬉しく拝聴した。二つ目は応用生物化学科の大坪研一教授から「おいしさと機能性を求めて」と題して新潟大学の米の研究と国際学者として語る未来の食糧と国土や文化の保全からの視点からの米のことを考えさせられた。在学中の学科で農芸化学科のその後はと

思った、会の始まる前の幹事会で今日は生協を開けてあります是非寄ってお買い求めくださいとアナウンスがあった。「新雪物語華甲」、農学部フィールド科学教育センターで減農薬・減化学肥料で栽培された大吟醸用「越淡麗」を母米として、新潟大学創立60周年の還暦「華甲」を記念して塩川酒造(株)が丹精込めて作ったとある、その箱には新潟大学校章である雪の結晶六花の下にNext Step from 60thとあった、未来に続く次のステップも輝かしくあれと願った。

懇親会はホテルオークラ新潟コンチネンタルルームで開催された。

オープニングは若々しく力強くそしてリズムカルに打ち叩く樽太鼓（樽砦たるきめた）で始まった、新潟の夏祭り、大民謡流しで佐渡おけさとともに祭りを盛り上げる新潟甚句のリズムを先導する樽太鼓である、演者は同期生江尻秀夫率いる若者達で、この若者たちが新潟湊町で250年も前から民謡の伴奏楽器として使われた歴史と伝承を受けついでいることに感激した。祝賀会は三沢眞一実行委員長の開会挨拶のあと鏡開き（当然に樽は新雪華甲）である、乾杯は小林一三顧問から、そして旧友との久方振りの懇談が開催された。懇談の最中に、箕口秀夫幹事長から記念事業報告「故郷の森づくり」が壁面にあつらえたスクリーン一杯に映し出され、その経緯が説明された。そして懇談のバックに新潟大学

学生歌「阿賀野川辺に波さわぎ……、みはるかす越の山なみ……」が静かに流された、60周年記念同窓会に参加できなかった旧友にどのように伝えようかと思いいながら会場を後にした。

「イーハトーブ」から今日は

坂本 裕克（昭56農工）



イーハトーブより母校農学部60周年記念式典に参加するため、30年ぶりに

新潟大学を訪れました。在学中は各学部とも五十嵐への移転早々で砂上の楼閣ならぬ砂上の大学であり、まだ根を生やしていない趣がありました。春は風が吹けば砂が舞い上がり、夏の日差しの照り返しは厳しいものがあります。冬は雪雲のため低い天井の部屋に住んでいる様で常に押しつぶされそうに感じていました。世のため人のためを目的にした学生運動も、出口のない閉塞状態から個々の生活に埋没して、理想からは遙かに遠ざかった思いがありました。肉体的にも心情的にも、まことの道を求めつつも痺れて硬直状態だったと記憶しています。8年間の長い長い大学生活を先生方の温情と仲間の協力で卒業できましたが、あの事柄は、直接脳に印刷され、時に

より再燃することを禁じ得ません。つらい時代でした。

今年度60歳定年の節目を迎えるに当たり、もう一度母校を訪れ、自らを検証したいと考えました。

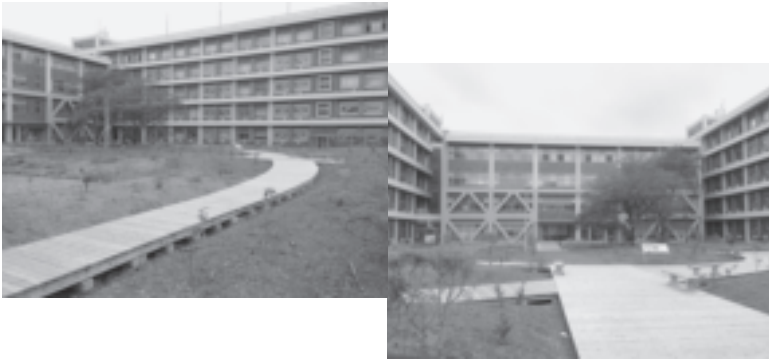
6月8日、式典で訪れた母校は、雨上がりの緑色濃く、樹下ではアカペラサークルの女子学生が歌い、緑の新潟大学ロゴ入りシャツを着たグループが、なにやら楽しそうに活動していました。教育学部脇ではイーゼルを持ち出した学生が油絵を描いていて、心地よい風が吹き抜けるアカデミーでした。

耐震補強工事のため樹木が撤去された跡地に、新「嵐丘庭」が作られていました。土壌改良とチップマルチ、木製歩道により広葉稚樹は守られ、30年後への大きなプレゼントと思われました。

祝賀会では、永らく会うことがなかった先生や同期生に久しぶりに会い、近況を尋ねたり昔の話をして青春を共有できたことに感謝しました。自分のことは、他人という評価付き鏡があつて初めて分かると思えますので、どの様に写ったか聞



学生とともに成長する森「嵐丘庭」



きたいものでした。楽しい思いと共に新潟を後にしました。勤務校の先輩教師の宮澤賢治先生や郷土の先人新渡戸稲造博士にはなれませんが、私も教員として世のため人のためになりたいと思いを新たに旅でした。御案内いただきました同窓会に感謝いたします。

海藤 秀明（昭和56林）

六十周年記念事業は、記念式典及び講演会が改装された大学附属図書館で行われ、阿部先生、大坪先生の

大変興味深い内容の講演を聞くことができました。

また、記念事業の一環として、農学部校舎の耐震改修工事に伴い取り壊された「嵐丘庭」を復元し、「同窓生の学生の思いを、未来につなげる森づくり」とのテーマで、農学部の建物の周辺に新潟県の代表的な樹種の苗木が植栽され、それを巡る回廊が配置された庭が完成してまいりました。苗木は、まだ1m程度ですが、学生たちが管理して十年後、二十年後にはその中を散策できる郷土の森に育てていくとのこと。今後在籍する学生がその時々成長していく森と関わり、将来の同窓会で思い出話として語り合うあうことを思いました。

懇親会は、ホテルオークラ新潟を会場に、大勢の方々が参加され大変盛大であり、多くの先輩や同僚などと昔話に花を咲かせ、楽しく歓談するなど充実した時間を過ごすことができました。

記念事業の準備に当たられた方々に感謝を申し上げますとともに、農学部同窓会の今後益々の発展をご祈念いたします。

明間 基生（平6畜産）

卒業してからもうすぐ二十年になります。卒業時は、バブル景気が急激に衰退し、世間知らずの学生の身

にも、漠然とした危機感が感じられた頃でした。幸い、福井県庁に入庁することができ、試験研究、普及指導の現場、もつと現場漬けの牧場、折り悪く家畜伝染病などに振り回された行政を経験させていただきました。その間、大学に顔を出したのは一度きりで、何とも義理人情に欠ける恩知らずな卒業生でした。すみません。

今回、六十周年の記念式典に参加させていただき、十数年ぶりに大学周辺を歩きましたが、すっかり変わったしまった風景の中にも知っている店が残っていたりして、大変懐かしく思いました。構内の印象も、何か創造的なものを期待させる空気が漂うようになったと感じました。これは学生時代の私を感じ取れなかっただけかもしれません。

式典会場には、席が埋め尽くされるほどの先輩方が来場され、席を空けて立ち見をしようかと思つたほどでした。敵かに行われた式典の中で、下條学長、新村農学部長にご祝辞をいただき、続く感謝状贈呈で同窓会事務局の阿部さんがご退職になると知りました。最後まで同窓会福井支部の面倒をみていただき、ありがとうございました。深く感謝いたします。記念講演では大坪先生と阿部先生に最新の研究成果をご教授いただきました。ともに現場に根ざした研究で大変興味深く拝聴いたしました。ただ、大坪先生のご講演の中で、

加工品に使用された米の品種ですら特定可能な遺伝子判定技術があるとすることで、行政マンの悪いクセですが、いろいろな意味で目眩を感じました。また、休憩時間に会場となった図書館を見学しようとしたところ、土曜日にも関わらず学生さんで一杯でした。気づくと式典会場の舞台上のテラスにまで勉強している学生さんのシルエツトが見えます。大変頼もしく思いました。

式典で贈呈された、生まれ変わった嵐丘庭は、最初に感じた構内の空気が大変良く調和しているという印象でした。農学部の前が明るくなつたことが、構内の雰囲気をも明るくしたのかもしれない。今は苗木の木々が育つにつれて、どんどん変わっていく将来の農学部が想像され、設計や造成に携わった方々のセンスの良さに感心しました。

今なお高い就職率に裏つけられるように、新潟大学農学部は世の中に期待されている学部だと思えます。今回の式典に参加させていただき、その空気を確認できたことが一番の成果でした。疲れている場合じゃない。明日から頑張ろう。



支部だより

◆北海道支部

本年度で十七回目を迎える新潟大学農学部北海道同窓会の総会は、十月十九日（土）に、上川管内美瑛町にある白金温泉「白金四季の森ホテルパークヒルズ」で開催されました。数日前に十月中旬としては異例の降雪があり、路面状況が心配されましたが、当日迄に道路の雪も無くなり、秋晴れとなりました。近くには、近年、TV取材等で話題となり、観光名所となっている「青い池」もあり、



賑わっていました。

開催案内は毎回九十通ほど出していますが、当日、他の用務がある方も多く、総会出席者は五名でした。出席できない方からもハガキやメールなどで近況報告があり、総会で紹介しています。ここ数年、参加人数が減少傾向で、今後も更なる参加呼びかけが必要となっています。

総会では、成田会長の挨拶の後、平成二十五年度経過・会計報告、五十嵐副会長が出席された新潟市での同窓会常任幹事会報告、平成二十六年年度事業・予算案について協議し、それぞれ承認されました。役員改選では、新会長に明田川氏が選任されました。

総会に続く宴会では、近況報告等を行い、二時間余り語り合いました。その後、部屋での二次会では、留萌産の海産物の珍味をつまみながら、新潟の銘酒を飲み比べ、深夜まで盛り上がりました。

翌日の朝は、少し疲れが残っていましたが、温泉で疲れを癒し、それぞれ帰途につきました。

次回同窓会は、平成二十六年秋

頃、十勝方面で開催することとしました。

佐藤 誠一（昭60農化）

◆秋田県支部

秋田県支部の総会は、6月29日（土）にホテルメトロポリタン秋田で19人の出席のもと開催されました。今回は、秋田県立大学短期大学部名誉教授の神戸和猛登先生（昭31卒）が、著書「リンゴ樹相診断のすすめ」を出版されたことから、この出版記念祝賀会も同時に開催しました。先生は、現在も積極的に県内各地で講習会を開催されており、先日は秋田市内の生産者を対象にした講習会をお願いしたところです。祝賀会の挨拶の中で先生が「樹園では農家が社長で樹が従業員である。社長は従業員が働きやすい環境を整えてやる必要がある」ということが大切

は樹相を診る力を養うことが大切だ」と話されたのが印象的でした。その後は出席者から、農学部同窓会創立60周年記念事業に出席した時の状況や、それぞれの仕事の内容などについて近況を報告し合い、大いに盛り上がりました。

また、神戸先生が第136回秋田県種苗交換会において「農業功労者表彰」を受賞されたため、県内の果

樹関係者を対象に

した「お祝いの会」が11月30日

（土）に秋田ビューホテルで開催されることになり、本

支部の忘年会もこれに併せて開催させていただきます。平成25年の事業を締めくくりました。

さて、秋田県での今年最大のイベントは「第29回国民文化祭」です。これは、全国各地で様々な文化活動に親しんでいる個人や団体が、日頃の活動の成果や実力を披露し交流する「文化の国体」とも称されるもので、10月4日から11月3日までの1ヶ月間に、県内全市町村で70を超える事業が実施される予定となっています。昨年の「デステイネーションキャンペーン」に続く全国規模のイベントであり、大勢の参加者や観客が訪れ、秋田県の観光や地域のにぎわいづくりに結びつくことが期待されています。

鈴木 善彦（平3農）



◆ 福島県支部

今年も、福島第一原発事故など震災復興、廃炉への作業が続いております。

この状況の中、7月27日(土)、福島ビューホテルに於いて、三年ぶりに福島県同窓会が開催されました。

会長挨拶では、先日開催された創立60周年記念式典について述べ、当日参加された方からの補助解説もあり、一層、当日の様子が伝わったように思います。

次いで、事務局長の沢田吉男さんから、7月20日(土)に開催された「首都圏同窓会総会」に招待された様子についての報告がありました。



昨年と同窓会常任幹事会において、首都圏支部長代理・佐藤純一様から、「首都圏からの支援をしたいと思います」とのお話が

あり、「福島県の被害状況」の報告の運びとなりました。「状況資料」による報告を終え、懇親会の席までのご招待であった」との内容でありました。この場をお借りして、首都圏同窓会の皆様方に感謝申し上げますと思います。

続いて、懇親会となり、宴は一層の盛り上がりを展開、山口武志さん・佐藤洋孝さんの六花寮歌「四季の新潟」から始まり、ひと時、思い出多い古き良き時代の学生生活に戻るこゝろが、河渡のキャンパスが、走馬灯のように、目に浮かびました。

そして、今は、遠い昔になった安達高時代の教え子の一人、村上佐俊さんに会えたこと、更に、その時のクラスの一人が新潟大を卒業した後、現在、安達高の事務長をしていることが伝えられ、嬉しさも最高でした。

福島原発事故の収束へ、国が前面に出て対応すると報道にはあり、進展の様子が知りたい。「福島復興計画」には、新潟大学の力を活用すべきだと本日の参加者の皆さんが、異口同音、訴えていました。

高久 英昭 (昭32農)



◆ 首都圏支部

今年6月に新潟大学農学部同窓会60周年記念事業が行なわれたので、第27回首都圏農学部同窓会総会を、7月20日(土)東京ガーデンパレス(お茶の水)で開催しました。出席者は26名でした。

今年、課題であった支部規約の制定及び振替口座の開設を幹事会で決定し、総会議事の中で、村上会長が活動報告と併せて報告を行いました。続いて、会計報告及び監査報告があり、質疑応答がありました。活動報告、支部規約、振替口座開設、会計報告及び監査報告は、報告の通り承認されました。続いて村上会長より、S58年農工卒(S60年院卒)の柳雅之さんを幹事に加えたいという提案があり、承認されました。柳雅之さんより自己紹介があり、若手ももっと積極的に参加できるように同窓会にしたい、という意見表明がありました。続いて講演に移り、福島県農林水産部農村地再生対策室に勤務する沢田吉男氏(S56年農学科卒)から、「放射能災害からの復興」という演題で講演をして頂きました。

一昨年の東日本大震災後、東京電力の福島第一原発が水素爆発を起し、広範囲にわたって放射性物質が

大量に放出されました。沢田氏は、大震災直後から、農産物のモニタリング、土壌分析、農地の除染などに携わってこられ、福島でどのようなことが起こり、それに対してどのような対策を取ってきたのか、詳しく説明をして頂きました。詳しい内容は紙面では書ききれませんが、講演後、新村農学部長を始め、出席者からは多くの質問が出て、活発な質疑応答がありました。最後に、沢田氏から首都圏の同窓生に期待することとして、「福島県は様々な農林水産物を生産する農業県であり、首都圏が大きな出荷先である。福島を支援するために、県産農林水産物を是非購入して下さい」との要望がありました。首都圏支部の皆さん、これからも福島を支援していきましよう。

その後、記念撮影の後、懇親会に移りました。最初に

来賓の新村農学部長と田島首都圏



同窓会幹事からご挨拶を頂き、金子前同窓会長の音頭で乾杯をした後、美味しい食事とお酒で楽しく懇談しました。卓上には、「新潟大学の酒」も用意され快飲。若桑さん、大橋さん（福島出身）、岩野さん、寺田さんから一言づつお話をして頂き、最後に土屋さんの音頭で、全員で「四季の新潟」を歌って、来年又再会することを誓って会を終了しました。

佐藤 純一（昭47農化）

◆新潟県支部

去る2月8日（土）ANAクラブプラザホテル新潟において、第3回新潟支部会が開催されました。当日は、満85歳の若林さん（S29農学）を始め、72名の同窓生の皆さんから出席いただき、和気藹々のなかで楽しく会が進められました。



総会では、事業・会計報告、会則改正、役員改選が提案され、満場の拍手で承認、その後新役員の紹介、大竹先生から学部の近況報告と続きました。

懇親会は、白井新支部長の挨拶、小林顧問（S33林学）の乾杯によりスタート、60周年記念CDをBGMとして流しつつの歓談が行われ、あつという間の楽しい一時でした。

最後に佐藤さん（S35総農）の指揮で「農学部学生歌」を熱唱、三沢名誉教授（S44農工）の万歳で中締め、名残を惜しみつつ散会となりました。

平成24年1月28日の設立総会でスタート以来2年が経過し、同年10月27日の全学同窓会交流会（農学部企画）を読み替えた第2回支部会、又昨年6月の「農学部同窓会60周年記念式典」、10月の全学同窓会交流会への参加呼びかけなど、少しずつ活動が定着してきたと感じております。

今後は、同窓会のホームページ、「松涛」などの広報ツールや口コミで、徐々に参加者を増やし、活動内容も充実させていきたいと思えます。皆様方のご支援・協力をよろしくお願い申し上げます。

【新役員】

支部長・白井敏彦（S55農

学）、副支部長・大嶋良夫（S58農工）、鈴木健次（S52農工）、高橋一成（S53農学）、庶務会計・佐野義孝（S60農学）、会計監査・山本仁志（S39林学）、椎谷一幸（S63畜産）

渡辺 仁（昭52農工）

◆長野県支部

平成25年度の長野県支部定期総会（第17回）が平成25年10月26日（土）長野市のホテル信濃路で開催されました。今回の出席者は10人でしたが、和やかな雰囲気の中で楽しい一時を過ごしました。

総会では、平成25年6月8日（土）に新潟市で開催された本部常任幹事会と60周年記念式典へ長野県支部の代表として出席した増野和彦氏（昭57林）から会議と式典の内容報告がされました。続いて支部会計報告、役員選任を行い、来年の定期総会は松本市で開催し、大勢の会員に参加して頂くよう計画することを決めました。

また定期総会には、数年前から各方面で活躍している会員の中から講演をして頂くことをきめ、今回は、本年度第21回日本木材学会地域学術振興賞を受賞した増野和彦氏（昭57林）から『食用きのこ類の育種及び栽培技術の開発と地域振興への貢

献』と題して、クリタケとヤマブシタケの菌床栽培技術の開発について講演をして頂きました。

その後、情報交換と

懇親会に入り、お酒を飲み交わしながら参加者全員から、近況報告や新潟での思い出話で花を咲かせました。最後に全員で、『四季の新潟』『農学部学生歌』などを歌って閉会しました。

年一度の総会ですが、なかなか参加される会員は少ないのが課題です。ここ二、三年初回参加の会員も増えておりますので、本紙面をご覧の会員の方、総会の案内通知が届きましたら、気軽に出席してください。

なお、役員の変更が一部ありましたのでお知らせします。

▽顧問・佐藤政彦（昭33林）▽支部長・松坂賢（昭41農）▽副支部長・西原義久（昭43農工）手塚光明（昭46農）今井寛（昭46農）黒沢真一（昭47農）▽事務局長・小松正孝（昭55農化）▽幹事・桜井正一（昭46農）沖村和





2015年春 北陸新幹線開業

北陸新幹線開業キャッチフレーズ・ロゴデザイン

開催していただきありがとうございます。代わりに、富山県で今後開催されますビックイベントを農林水産業関係を含め3点PRさせて頂きます。

まず、一番目として、なんといつても、平成27年3月(予定)に開業されま

す、「北陸新幹線」です。名称は、「かがやき」「はくたか」「つるぎ」です。東京から高崎、長野、上越を経緯し、富山県内は、「黒部宇奈月温泉」「富山」「新高岡」の3駅を經由し、石川県金沢駅まで開通します。最終的には、大阪まで整備される予定です。完成時期は、未定です。「北陸新幹線」を利用すれば、東京まで最短で2時間7分と現在よりも64分短縮されます。首都圏からも身近な距離となり、旅行やビジネスには、非常に便利となります。ただ、一つ残念なこととして、富山と新潟を結ぶ特急「北越」が、現在、日に5往復走っていますが、新幹線が開通すると、存続するか不明です。JRでの直行列車がなくなると、新潟が遠く感じます。



次に、2番目として、同じく平成27年秋に開催されます「第35回全国豊かな海づくり大会」です。この大会は、①水産業の明るい未来につなげていく大会②「森・川・海」の環境保全の推進③おいしい富山の魚など富山県の魅力発信等のテーマで、富山県の中央部に位置する射水市を中心に開催されます。

今年で3年目となる橋本孝一会長

の挨拶に続いて、例年のように朝日泰蔵事務局長より会計報告をしていただき、最後に明

◆富山県支部

これからの富山県でのビックイベント

富山県支部事務局を担当しております坪田です。通年ならば、毎年7月に開催されます県支部の総会の概要等を御紹介しておりますが、今年度は、事務局の不出席によりいまだ

す、「北陸新幹線」です。名称は、「かがやき」「はくたか」「つるぎ」です。東京から高崎、長野、上越を経緯し、富山県内は、「黒部宇奈月温泉」「富山」「新高岡」の3駅を經由し、石川県金沢駅まで開通します。最終的には、大阪まで整備される予定です。完成時期は、未定です。「北陸新幹線」を利用すれば、東京まで最短で2時間7分と現在よりも64分短縮されます。首都圏からも身近な距離となり、旅行やビジネスには、非常に便利となります。ただ、一つ残念なこととして、富山と新潟を結ぶ特急「北越」が、現在、日に5往復走っていますが、新幹線が開通すると、存続するか不明です。JRでの直行列車がなくなると、新潟が遠く感じます。

今年度の福井県支部は、平成25年11月20日(水)に、福井市内で総会を開催いたしました。昨年からは、若い方も参加しやすいよう、また本会からいただく助成金を有効に使うべく、会費を大幅に下げています。「雪の季節は避けよう」、「福井駅から歩いてすぐの会場にしよう」とこれまで参加者の要望に合わせて改善を行ってきました。あとは曜日を週末にすれば、遠方の会員も参加しやすいかな。今後の課題です。

今年で3年目となる橋本孝一会長の挨拶に続いて、例年のように朝日泰蔵事務局長より会計報告をしていただき、最後に明

間から近況の報告をいたしました。今年は60周年記念行事があったこと、素晴らしい記念講演があったこと、嵐丘庭が新しくなったことを報告しました。ホテルオークラで祝賀会があったものの、居並ぶ諸先輩にビビって、若輩は一步も動けなかったことも包み隠さず白状いたしました。

続く懇親会では、各自の近況を自己紹介を交えて語ります。今年仕事

◆福井県支部

坪田 安弘(昭57畜産)

幹事なのに何を話したか覚えておりません。笑って許してくれる会であった。

助成金用の証拠写真、失礼！記念撮影を行い、恒例の学生歌を歌って締めとなります。私をはじめ、もはや多くの参加者はこの歌に聞き覚えがありません。力強く歌っていただけ

ける先輩方がいないとメモロです。60周年記念行事で作っていただいたCDのおかげで無事に乗り越えられました。感謝感謝です。

さて、来年はどうしようかな。ぼたん鍋でもしたら、みんな来てくれるかな。

明間 基生(平5畜産)

同窓生からのたより

新潟県に感謝

廣瀬 久人 (平6林)

① 近況報告
高田農業高等学校生物資源科に勤務をしています。

授業は主に林産加工を担当しています。学生時代は林業を学んできましたが初任以来十八年間食品関連学科で教鞭をとりました。昨年度より同校の森林資源コースで勤務しており、現在に至っています。



四日の日程で行ってきました。常々現地の人々との交流が少ないと感じていましたので、今回は農家で1日体験実習及び宿泊という日程を組みました。農家の迎えの車に乗せられていく不安そうな様子を見て、心配になりましたが翌日の彼らの表情の変化を見て、ひと回り成長したなと感動しました。コミュニケーション不足といわれている世代ですが別にそんなことはないと思っただけで本県勤務二十年を迎えます。これまで色々なことを経験させて頂きました。まだまだ力不足ですがこのような他県出身者で何の取り柄もない私を育ててくれた新潟県に感謝していますし、これからも新潟県のために尽力したいと思っています。

② 趣味、または熱中していること
熱中していることは木工製作です。半分は趣味でしょうか。木工機械を使い、椅子や机、木箱などを作っています。

③ 最近感動したこと
現在長岡から高田に高速道路で通っていますが、初冬の晴れた朝、西山付近で雪化粧をした霊峰米山の姿。米山を越え、柿崎の付近で眺める真っ白な妙高連山の姿に毎日感動しています。(最近通勤疲れしています)が……)

④ 大学、同窓会、学生の皆さんへの「意見、」提言

大学と同窓会には有形無形にお世話になつていきます。学生の皆さんには常に感謝の気持ちと向上心を抱いていたいただきたいと思っています。

⑤ 次回に執筆していただく同窓生の紹介

同級生(年齢的には先輩ですが)である高橋正樹さんをお願いします。

波への執着心

齋藤 晶行

(旧姓 深澤 平6農工)



① 近況報告
私は、平成6年卒業後、静岡市に本社を置く鈴木建設株式会社に入社し、この3月で連続20年になります。

入社当初は、土木工事の現場監督として配属されましたが、その後、ISO管理、土地開発、建築営業、倉庫設計と多岐にわたる業務を経験し、現在は総務部に所属しています。日常の業務としては、株主総会等の庶務業務、社有不動産の管理、受注したPFI事業のプロジェクトマネージャー等を行っています。

② 趣味、または熱中していること
社会人になって、会社の先輩に誘われサーフィンを始めてからは、休

日のほとんどを海で過ごすようになりましたが、定説どおり結婚後はなかなか行くことができなくなり、この数年は年に2、3回行けるかどうかというところでした。

しかし、昨年7月に家族で行ったハワイで久しぶりにサーフィンをしてからは、再び波への執着心が芽生え、休日は家族の制止を振り切ってサーフィンを楽しんでいます(朝9時までには帰るようにしています)が……)。

③ 最近、感動したこと
5歳の長男にサツカーを習わせていますが、日頃、本人からは「お父さんがサツカー好きだからやっている」と言われへ「む」ことが多い中で、先日の試合で一生懸命ボールを追いかけている姿を見たときは感動しました。

④ 大学、同窓会、学生の皆さんへのご意見、ご提言
同級生と久しぶりに会った時に盛り上がるのは、決まって学生の時の幼い(下らない)行動やそれによって失敗した時の話です。学生の皆さんには、一見無駄とも思えるそうした時間が実は貴重だということを伝えたい。

⑤ 次回に執筆して頂く同窓生の紹介
農業工学科の「サル」と恐れられた同級生の勝又さんにリレーします。彼は、良い意味でも悪い意味でも身のこなしが軽いです。

第19回農学部フォーラムご報告

第19回農学部フォーラム実行委員会委員長 渡邊剛志

平成25年11月2日(土)に、第19回新潟大学農学部フォーラム「新潟清酒の新展開」が、改修で見違えるような新酒の展示場となった農学部C110大講義室において行なわれました。産官学の6名の講師により、新潟清酒の魅力と新たな取り組みについて話題を伺って頂き、一般市民、酒造業界・観光業界の皆様、大学教職員、大学院生、農学部生等、あわせ138名が参加し、予想以上の盛会となりました。

まず新農学部長の挨拶を皮切りに、醸造試験場場長の渡邊健一氏の基調講演では新潟のお酒および酒造りの現状と特徴を、農学部卒業生の菊水酒造・宮尾俊輔氏、朝日酒造・新野義弘氏からは新しいコンセプトの日本酒開発と販売戦略/地域に貢献し地域に愛される酒蔵としての努力について、尾畑酒造・尾畑留美子氏からは日本酒の海外展開の状況と将来性や効果について、醸造試験場専門研究員の金桶光起氏からは酒粕の機能性やさかすけの魅力・発展性について、高橋能彦農学部FCセン

ター長からは新潟大学ブランドのお酒の開発の苦労と喜びについてご講演頂きました。パネルディスカッションでは酒類の関税廃止への取り組みや「さかすけ」の機能性についての質問などをともに、活発な討論が行われました。皆さん大変話がお上手で、それぞれ特有の角度と切り口からのご講演により、有意義でも楽しいフォーラムとなりました。また、休憩時間とフォーラム終了後に行われた日本酒とリキュールの試飲も大盛況で、これまでの日本酒にない概念のお酒も味見することができました。今回のフォーラムが新潟大学農学部と酒造業界の関わりを再確認し、今後の連携協力関係の再展開を考へる契機になるものと期待しております。フォーラム開催にあたりまして、ご支援とご協力を頂き、あるいはご参加下さった皆様に心から御礼を申し上げます。実行委員会委員・大竹憲邦、佐藤努、城斗志夫(副委員長)、鈴木一史、原崇、美子、仲野千秋



総合討論での活発な議論の様子

協力・西海理之
共催・新潟大学
大学院自然科学
研究科「食づく
り実践型農と食
のスペシャリス
ト養成プログラ
ム」/新潟大学
地域フードサイ
エンスセンター
後援・新潟大学
農学部同窓会

国際交流委員会の動き

農学部国際交流委員会委員長 山田宜永

今年度における農学部の国際交流の主な動きをご報告いたします。今年度も、海外の多くの大学から新潟大学農学部と国際交流のための往来がありました。まず、平成25年8月28日(9月1日)、新潟大学G「グローバルジムシステムによる能力開発プログラム」と連携した国際サテライトセミナー「エコアイランド佐渡」が開催され、インドネシア・ポゴール農科大学より2名、タイ・チェンマイ大学より2名、マレーシア・プトラ大学より2名、マレーシア・ペラデニア大学より2名、スリランカ・ペラデニア大学より4名の教員および学部学生を招聘しました。セミナー期間中には、マレーシア・プトラ大学 (Khin Aikhaq 先生) とは交流協定の締結に向けた資料およびスケジュールの確認が、スリランカ・ペラデニア大学 (Kankanmalage Satharisinge 先生) とは、今後の学術的交流および学生交流の協定締結の可能性についての打ち合わせが行われました。また、10月には、国際サテライトセミナーの報告会が行われ、海外からの農学部生が自国の農業問題や環境問題を紹介し、その解決策を語り合う素晴らしいセミナーであったことが報告されました。

12月17日(21日)には、ロシア沿海州農業アカデミーのロシアン・アンドレイ学長、イヴァス・オルガ国際課長およびシシュロフ・アレクサンドレ農業機械部門長が農学部を訪問され、農業説明会、研究室訪問および懇親会が開かれました。滞在中には、学長表敬訪問や新潟市長表敬訪問も行われました。農学部の多くの研究

室を紹介したことで、ロシア極東地域との今後の共同研究の展開が期待されます。平成26年2月には、マレーシア・プトラ大学のRenee学長を招聘し、大学間交流協定の締結のための調印式が開催される予定です。下記のとおり、平成21年より毎年開催される世界農学部学生会議「IAS」への本学農学部学生の参加をきっかけとして、マレーシア・プトラ大学とは強いつながりがありました。今回の交流協定の締結により、より一層の交流が期待されます。昨年度に続き、第4回世界農学部学生会議「IAS」が平成26年2月13日(22日)にマレーシア国プトラ大学で開催される予定です。ウイタカ・アンドリュウ先生らの引率のもと学部生8名が参加し、自国農業の紹介等について講演することになっております。11月には、恒例の農学部留学生と指導教員との交流会が開催されました。留学生の家族や国際交流に貢献している日本人院生・学部生も含めて約70名が参加し、中国およびバンダラデッサンからの留学生による催しも披露されるなど、他学部も羨ましがれる賑やかな夕食会となりました。

12月17日(21日)には、ロシア沿海州農業アカデミーのロシアン・アンドレイ学長、イヴァス・オルガ国際課長およびシシュロフ・アレクサンドレ農業機械部門長が農学部を訪問され、農業説明会、研究室訪問および懇親会が開かれました。滞在中には、学長表敬訪問や新潟市長表敬訪問も行われました。農学部の多くの研究



農学部留学生との交流会の様子

2012年度新潟大学農学部同窓会 事業費決算報告 (平成24年5月1日～平成25年4月30日)

1. 収入の部 (円)

科 目	予 算	決 算	増 減	備 考
基本収入からの繰入	3,850,000	3,850,000	0	
前年度繰越	480,355	474,963	▲ 5,392	
利子・雑収入	645	403	▲ 242	利息 403
合 計	4,331,000	4,325,366	▲ 5,634	

2. 支出の部 (円)

科 目	予 算	決 算	増 減	備 考
1. 事務局費	500,000	420,824	▲ 79,176	全学交流会参加補助、消耗品、通信費、医病落成式祝儀、謝金等
2. 会議費	460,000	448,935	▲ 11,065	常任幹事会開催経費、支部役員出席旅費等
3. 名簿情報維持管理費	60,000	52,500	▲ 7,500	名簿データメンテナンス
4. 卒業祝賀会費	700,000	700,000	0	
5. 退職者記念品費	12,000	27,300	15,300	定年退職者(教員1、職員1)
6. 嵐丘庭維持費	0	0	0	校舎改築中
7. 「松涛」発行費	1,300,000	1,228,582	▲ 71,418	「松涛」「しおり」印刷、郵送等
8. 慶弔費	50,000	24,107	▲ 25,893	弔電、生花等
9. 支部活動助成費	350,000	350,000	0	8支部(6支部35,000円、新潟県・首都圏支部各70,000円)
10. 学文活動助成費	200,000	245,692	45,692	3大学合同研修会、F Cシンポ、新大G P、国際シンポ補助
11. 全学同窓会負担金費	376,000	375,105	▲ 895	
12. ホームページ費	70,000	48,720	▲ 21,280	コンテンツメンテナンス
13. 出前講義旅費助成費	210,000	211,412	1,412	教員による高校等への出前授業、アドミッションフォーラム等
14. 予備費	43,000	0	▲ 43,000	
合 計	4,331,000	4,133,177	▲ 197,823	

3. 差引残高(A-B) 192,189円 次年度への繰越金

2013年度新潟大学農学部同窓会 事業会計予算 (平成25年5月1日～平成26年4月30日)

1. 収入の部 (円)

科 目	本年度予算	前年度決算	増 減	備 考
基本収入からの繰入	4,550,000	3,850,000	700,000	
前年度繰越	192,189	474,963	▲ 282,774	
利子・雑収入	403	403	0	
合 計	4,742,592	4,325,366	417,226	

2. 支出の部 (円)

科 目	本年度予算	前年度決算	増 減	備 考
1. 事務局費	570,000	420,824	149,176	役員会・通信・電話料・謝金・P C更新等
2. 会議費	460,000	448,935	11,065	常任幹事会旅費等
3. 名簿情報維持管理費	60,000	52,500	7,500	名簿情報メンテナンス等経費
4. 卒業祝賀会費	700,000	700,000	0	卒業祝賀会費補助
5. 退職者記念品費	24,000	27,300	▲ 3,300	定年退職者(職員2)
6. 嵐丘庭維持費	100,000	0	100,000	
7. 「松涛」発行費	1,450,000	1,228,582	221,418	「松涛」印刷、発送等、30号特別版8ページ、募金者名簿2ページ増
8. 慶弔費	50,000	24,107	25,893	弔電、生花代等
9. 支部活動助成費	350,000	350,000	0	支部活動助成(6支部@35,000、首都圏・新潟県@70,000)
10. 学文活動助成費	250,000	245,692	4,308	3大学合同研修会、F Cシンポ、新大G P、農学部フォーラム等
11. 全学同窓会負担金費	376,000	375,105	895	分担金
12. ホームページ費	70,000	48,720	21,280	H Pメンテナンス等経費
13. 出前講義旅費助成費	240,000	211,412	28,588	80,000円×3学科
14. 予備費	42,592	0	42,592	
合 計	4,742,592	4,133,177	609,415	

2012年度新潟大学農学部同窓会基金会計報告 (平成24年5月1日～平成25年4月30日)

1. 収入の部 (円)

科 目	前 年 度	今 年 度	増 減
繰越金	54,594,493	55,782,027	1,187,534
基金収入(入会金)	4,807,540	5,103,360	295,820
利子	73,245	68,339	▲ 4,906
60周年募金	0	7,020,000	7,020,000
60周年式典参加費	0	300,000	300,000
合 計	59,475,278	68,273,726	8,798,448

2. 支出の部 (円)

科 目	金 額	備 考
事業費繰入	3,850,000	
60周年事業経費	2,377,405	
嵐丘庭工事内払い金	21,001,050	
合 計	27,228,455	

3. 次年度への繰越金 (円)

科 目	金 額
収入合計	68,273,726
支出合計	27,228,455
繰 越 金	41,045,271

注) 2013年度は、60周年事業遂行のための残りの経費を、基金から支出する。

